小学校は
エンピツの
匂い

東京学芸大学 附属
小金井小学校 同窓会

撫子の会

会報 13 号

●もくじ

1＝会長メッセージ
2＝「鵜原の海」についての報告
3＝母校からのメッセージ
4＝特集「あの先生は、いま」
5＝寄稿三編
6＝クラス会便り

撫子の会は［いま］

小金井世代が中心に

もう一安心加わった 鵜原の海

撫子の会は、昨年六月発行の会報12号／別冊で「いま 鵜原の海が産廃処分場の建設で 危ない！」を特集し、「何でも反対」を避けるため調べたところ、場所と地形に問題があり、反対署名を呼びかけました。その結果皆様から1932通が寄せられ、千葉県庁に提出して地元ほかの署名書に加えることができました。こうした各方面の動きがあって、建設業者による申請準備は地元の住民理解を得られないまま未了期限切れとなり、県はこれを申請取下げと見なす決定を下し、ひとまず安心できました。さらに今年三月には地元勝浦市の市長が反対宣言を出し、もう一安心が加わりました。母校の後輩たちのために撫子の会が一助を果たせたかと思うと、ホッとします。ご協力をありがとうございました。

とはいえ建設用地は依然として業者所有地のため今後どんな動きがあるか分かりません。撫子の会はこれからも地元組織と連絡を保ち、静かにウォッチしていきます。

広がった環 つながった世代

この署名活動は会員の環が広がる機会にもなりました。鵜原問題の会報が同級生に届いていないから送って欲しいとの依頼が豊島世代などからあり、名簿の空欄が埋まり、撫子の会への実際的参加が広がりました。また、会として父母の会に呼ばれて説明したことや、特集号が父母の会はもとより附属中学同窓会、さらには地元団体や関係他校にも参考にしていただけたことなどの広がりもありました。

この産廃問題は、小金井卒の若い世代による撫子の会への関心を高めるきっかけにもなり、小金井卒理事とのつながりが強まったとも聞いています。

撫子の会の これから

追分卒の私は会長就任挨拶で、小金井世代に交代して行きつつ三校の別をなくす「小金井化」を方針の一つに掲げました（詳報／会報8号）。その約束は着実に進んできています。理事会活動において小金井卒の理事が中心になり、それを豊島や追分卒理事がバックアップする場面が普通になっています。これは三校の歴史が一本に共有化された証でもあります。

こうした経緯のなかで、この秋、撫子の会は総会を迎えます。この総会では役員改選が議案の一つになり、これには「小金井化」を基軸にした新体制づくりが眼目になるでしょう。感覚も新たに若い世代をインヴォルブして活動して行く体制です。

およそ組織にとって健康な新陳代謝は不可欠です。撫子の会にとって、いま、この秋は、その新陳代謝を明確に形にすべき時だと考えます。

撫子の会／会長 金子修也

鵜原の海の自然を考えよう

「千葉県庁、産廃施設建設のみなし取り下げ判断後の動きについてのご報告」

野久尾　悟（昭和五十一年小金井小卒）

鵜原湾の北約五百mの谷間に計画されていた産業廃棄物最終処分場建設計画は、同窓生の皆様のご協力により、一九三二筆の建設反対署名を集め、平成二十三年九月五日に地元の方々とともに千葉県庁に届けることができました。地元住民以外からのまとまった署名が届けられたことは、千葉県庁としては驚きであったようで、地元反対の会の方々を勇気づけることにもなったと感謝の言葉をいただきました。さてその後について、ご報告いたします。

・平成二十三年九月十五日、千葉県庁がみなし取り下げの判断

（産廃施設設置計画の事前協議が審査指示の日から起算して二年を経過した時点で、審査指示事項の協議が終了していないことから、「申請を取り下げたと見なす」という県庁の判断）

・平成二十四年三月二十一日、勝浦市が「産業廃棄物最終処分場建設に反対する都市宣言」。住民の陳情で勝浦市議会が採択し併せて市長が宣言した。

建設予定地周辺は、静けさを取り戻し、現場事務所からも人影が見られなくなったとうかがっています。しかし、建設予定地は、業者の所有地のままですので、ふたたび建設の動きが起こる可能性を残しています。業者としては、前回と同様、千葉県庁に建設の申請を行うことは可能です。

同窓会としては、今後も地元の方々との連絡を保って静かにウォッチを続けていくことにいたしました。

今回の一連の動きを通じて、地元の方々との交流も深まりました。

「夏になると毎年、東京から子供たちが泳ぎに来ているな。」程度で、地元の方々は、あまり関心をもたれていなかったそうですが、私たちが鵜原の海に対して、これほどまでに強い思いをもっていることに本当に驚かれたようです。「この海はわしらの生業のための海だとばかり思っていた。」地元の漁師の方がおっしゃっていました。

「私たち附属の子供たちにとっては、育てていただいた大切な海なのです。そして、私たちの後輩たちにも、この海と自然のすばらしさを体験しもらいたいと思っているのです。」地元の会合に参加した折にお話ししました。

そして、今、地元の方々に新たな呼びかけを始めようとしています。

「今度、鵜原へ行く機会があったら、少しだけ早起きをして、一緒に浜掃除をやりませんか？」

「都会から鵜原へ遊びに来る子供たちの磯遊びの先生になってくださいませんか？」

海や自然環境の保全を一緒に考え、そして、次世代へとつなげていく作業をともにはじめようと話しています。

鵜原の海と自然は、今なお私たちに多くのことを教えてくれます。つなげていくこと、

続けていくこと、伝えていくこと。私たちは、その大切さを学んでいかなければいけません。

同窓会員皆様のご理解とご協力を引き続きお願い申し上げます。

二〇一一秋・鵜原産廃反対署名の添書きから…

副会長　川田紀雄転記

大変な事態、どうぞご健闘を。　旧教員

鵜原の海、至楽荘の生活の日々の中でたくさんのことに感動し、関心を持ち、たくさんの喜びを持ち、学んだりしました。美しい海が保たれ、至楽荘が良い環境に支えられ、多くのお子様達の良き小学校生活至楽荘生活と共に育まれますようにお祈りしています。　旧教員

六十年余り昔遠泳に参加し、半ばで同行の先生に白いサラシ餡を口に入れていただいたことを思い出したりしております。どうぞ頑張って下さい。　豊島卒

鵜原の危機に立ち向かう役員の皆様、お世話様でございます。　豊島卒

「活動」ありがとうございます。現在千葉在住であり、責任も感じております。頑張って下さい。　豊島卒

四、五年前に娘と孫を連れてなつかしい至楽荘に泊まって来ました。美しい環境をぜひ守っていただきたく存じます。　豊島卒

会報いつも楽しみにしています。

鵜原の海がずっと無事でありますように。　小金井卒

皆さん、ご協力ありがとうございました。

子は親と遊んでこそ

校長　飯田秀利

親にとって、子どもと一緒に野山で遊んだり、海や川で遊ぶことは、とても楽しいことです。日々の生活に張り合いが出ます。明日の仕事の大きな活力にもなります。

では、そのような遊びは子どもにどのような影響を与えるでしょうか。その問いに対する興味深い答えを、平成二十三年十一月に出版された国立青少年教育振興機構の調査報告書が明示しました。この報告書は、「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」の報告書であり、その一部で、子どもの自然体験とその後の意識形成との関連について論じています。ここには以下のような調査結果が載っています。

自然体験が豊かなグループ（Aグループ）の子どもたちは、「困ったときでも前向きに取り組む」と強く思う割合が、自然体験が乏しいグループ（Bグループ）の子どもたちの三・八倍でした。

また、Aグループの子どもたちは、「わからないことは、そのままにしないで調べる」と強く思う割合が、Bグループの子どもたちの三・四倍でした。

さらに、Aグループの子どもたちは、「勉強は得意な方だ」と強く思う割合が、Bグループの子どもたちの五・四倍でした。

これらから、子どもの前向きな意識形成にとって、親との関わりが深く、自然体験が豊かなことの大切さが分かります。この観点から、本校の子どもたちの保護者および卒業生の保護者の皆様には、より一層お子様と自然の中で遊ぶ機会を増やしていただきたいと思います。とは言え、勉強ができる子になるように、などと下心を持って無理に遊ぶとうまくいかないかもしれません。そうではなく、子どもとの遊びに夢中になり過ぎて、「まったくー、うちの親は大人げないんだから！」などと子どもに言われたらしめたものかもしれません。

一宇荘生活での学び

副校長　関田義博

一宇荘での生活は自然体験活動を中心に構成されています。子どもたちが荘周辺で取り組む自然調べ活動は「青空活動」という名称で、「総合的な学習の時間」に位置付いています。一宇荘での活動は至楽荘生活と同様に、教育目標である「明るく思いやりのある子」「強くたくましい子」「深く考える子」を育成する、本校の基幹の教育活動でもあります。

子どもたちは四～六年の三年間に、一宇荘周辺での自然調べ活動を、季節を変えて三回行います。活動のポイントは、児童が自ら自然の中から解決したいテーマを見いだし、テーマごとに友達とグループを作って問題解決することです。児童は、自然から見いだした問題に対して、これまで獲得した知識や技能を総動員して問題解決に取り組みます。その際、教師は児童の質問や要望等には対応しますが、細かい指導はせず、あくまでも児童の主体性を尊重して活動に取り組ませます。小金井周辺と一宇荘周辺の自然を比較する場合は、それぞれの共通点を見いだしたり、違いとその要因を見いだしたりしながら、児童は既に獲得した素朴概念を修正して新たな見方や考え方を獲得していきます。

荘生活では家族に頼ることができないため、児童は友達と協力するために為すべきことや友達を思いやって行動することの大切さを、体験的に学んでいきます。

●特集「あの先生は、いま」

小金井小学校長２代目宮畑虎彦先生を囲んで　昭和39年

佐島群己

私は、五十九年間の教員経験をふりかえっている。一九五五（昭和三十）年、東京学芸大学附属豊島小学校に勤めて、本学の教育と研究の源泉に触れ、学んだことを思い出す。あのころの先生は、一人ひとり、教育の理論と実践力を授業で検証していたことに対して、驚異を感じ、附属教師の果たす役割の大きさを認識した。

最初担任したのが三年生だ。同学年には、学校劇の大家柴田秀雄先生と社会科教育の実践理論家の木川達爾先生であった。私は、両先生の一挙一動、心くばりに注視し、一言も聞きもらさぬようにメモをとる。

就任早々、私は「社会科授業研究」で「豊島保健所」を取り上げた。人間の働きに着眼して、「豊島保健所の人々は、地域社会の人びとの福祉・健康のため組織的活動をしていることを理解させる」ことにある。そこで、私は何度も保健所を訪ねた。それは、教材となる確かな情報を得るためであり、子どもに実感的認識を高めたいためである。

授業研究では、体育の須貝光一先生、国語の相原永一先生、理科の高木藤樹先生などから、板書のし方・指示・発問などから、子どもへの対応、眼差しまで厳しく指摘された。それは、今にして、授業論・発達観・教育観に裏打ちされた「実践理論」であった。これで私は研究の奥行きの深さを知り、自れの拙劣性を実感させられた。ここにあげた先生方は、他界された。フルネームで記憶に留める程、その教えを忘れることはできない。

忘れがたき唯一ご健在の先生は、伊藤一郎先生だ。先生は算数・数学教育の実践理論家である。学校の共同研究の推進役を務めておられた。幸い私は伊藤先生と三年間同じ学年で、学級経営から、教材開発・解釈・授業における子どもの思考力育成の構造（異同―包摂―依存の関係把握）論を授業実践で繰り返し検証し学んだ。まさに附属の研究は、理論と実践との融合を図り、「子どもの学習力の質」を高めるものであった。

私の附属小学校の十九年間の教育実践研究は、その後大学教師三十八年間（東京学芸大学・日本女子大学・帝京短期大学）の教育と研究の基盤となっていると考える。

鈴木　勇

私は、昭和三十二年に附属豊島小学校に赴任し、昭和三十八年に附属小金井小学校に移り、十五年間勤めました。今は喜寿を過ぎ傘寿に近づいています。人生で始めて、今年病気による入院手術を経験しました。その後の経過は良く、元気になってきています。

このことを契機に、私は限られた時間を有意義に日々充実させ、健康で生きる元気を出せることが大事だと強く思いました。日常生活では次のようなことに心がけて過ごしています。例えば、食生活のバランスに気を配り食べ過ぎないこと、週に四回ほど二十分以上の早足ウオーキングをすること、ストレスはうまく受け流しためないこと、人との出会いを大切に感謝する心を忘れないことです。

附属小学校に在職中で私の心に残ることの一つは、海の至楽荘、山の一宇荘、田園の成美荘（附属豊島小在職中のみ実施）を利用した宿泊生活であります。それは、卒業生から数多く聞きましたが、在校中のあの宿泊生活では人間として生きていくための強い根っこのようなものが育てられたといいます。確かに当時の三荘生活においては、子どもも教師も汗をかく体験、広く深い思考力、強い意志、たくましさと忍耐力、友人同士の絆の深さ、自己実現の喜びなど、一人ひとりが成長する原動力を身につけたといえましょう。私はこの宿泊生活に関わる仕事に現在携わっています。

私は、「人生終わり良ければすべて良し」と考えています。自分の人生というカンバスに、どのようなことをこれから更に描き入れられるか楽しみです。これまで私と関わり、育て支えて下さった方々に感謝をこめ、私はこれからも多くの人々の役に立つ仕事に一層傾斜をかけていきたいと存じます。

柄沢渥子

教職三十七年のうち、十五年を附属でお世話になりました。附属追分小で九年、附属竹早小で二年、附属小金井小で四年ですが、私の場合は、昭和十九年千代田区永田町小学校卒業後、附属竹早小（当時は東京第一師範女子部）の高等科で二年、更に東京第一師範女子部予科四年（途中で新制高校に変わる）、そして学芸大学と殆ど旧第一師範女子部、竹早の校舎で過ごしました。

縁あって附属追分に奉職することになり、家庭科専科として数年つとめました。

当時の（昭和二十七年）追分の校舎付近は戦災でも焼け残っていて、どっしりとした校舎でしたが、いかにもうす暗く、家庭科教室はなく、北側の廊下と同じ巾の細長のスペースに寄せ集めのミシン十台程と、調理室は地下倉庫の隣にあって、授業や研究発表のために、どれだけ掃除をしてもきれいにならなくて苦労したことをおぼえています。附属校の宿命として、研究会は週一、二回あって、当時ＧＨＱからの指令で、○○プランといった形で朝令暮改のように教育内容や課程への指示があったように思います。新卒の私には難解なことばかりでした。

当時のアメリカ大統領ニクソン氏が来日し、夫人が追分に視察にきて、家庭科の授業を見ていったこともありました。

家庭科専科ということで、給食にも関わりました。栄養士（森鴎外氏の縁戚にあたる方と伺いました。）と数人の調理師さんにいろいろ教えていただきながら、お手伝いをさせてもらいました。コロッケなど、一つずつ手作りで、当時としては立派な給食だったと思います。食器洗浄機などない時代でしたから、食器も一枚一枚手洗いで、汗が出切って、額から塩が吹くくらい頑張りました。

蓼科の林間学校は二年生からの参加で、夜になると、ホームシックでシクシク泣く子をなだめたり、鵜原の臨海学校では、五年生五泊六日、六年生六泊七日連続で参加、あいだ二日で体力的にもかなり厳しかったです。朝食、学習、水泳、昼食、昼寝、おやつ、水泳、夕食と、計画、おやつの調達と送付など、事前の段階からフル回転でした。でも、最後の日の遠泳で泳ぎ切った子供達の自信に満ちた顔付きをみると、すべてがふっ飛び嬉しさがこみ上げたものです。これこそが附属の伝統だと感じました。

平成22年10月17日　於　上野パークホテル
附属追分最後のクラス　毎年1回の集いを楽しみにしています

1955～56年　学芸会　出番を待つ間　校舎横

専科を数年して、初めて担任をした子供達は附属追分がなくなる最後の学年になり、彼らの後には、後輩はありませんでした。そして一番近くの竹早に移ることになったのです。

竹早は、私にとっては母校ではありましたが、やはり追分がなくなることの悲しさは大きく、当時は、夜遅くまで何日も会議の連続でした。連日の疲れでホッとしたい時は、農学部門側駒込寄りの名前は忘れましたがコーヒー店に、ひと時の癒しの時間を過ごすのが楽しみでした。その店は、確かぶどうの会（木下順二氏・山本安英氏）の事務所になっていて、時折お二人の姿をおみかけして、胸をおどらせたことを覚えています。新米の私がこんな思いでいる間も、飛松校長先生をはじめ松村教頭先生、先輩の諸先生方のご苦労ははかりしれないものがあったと思います。

竹早で二年、五年まで持って、腰山先生に後をお願いし私は小金井に移りました。

初めての担任、しかも五年間も受け持たせてもらった子供達（といっても彼らも還暦）とは、今でも年一回顔を合わせています。今では、一寸先輩の仲間として、声をかけてもらっています。

平成元年退職し、父の故郷群馬県榛名山麓に居を移し、両親を送り今は独居老人、朝夕　榛名山、浅間山を眺めながら土と親しむ生活を送っています。今年八十一歳、お陰様で医者知らず、運転免許も更新出来ました。

一九三一年、世界大恐慌の年に生を受け、戦前　戦中　戦後を経て、今、こんなに便利な世の中に生きています。いろいろな経験をその中で関わらせていただいた諸先輩、友人との絆が今の私を生かして下さっていると心から幸せに思い、感謝の毎日です。ありがとうございました。

今も現職で頑張っています

畠澤　郎

撫子の会の皆さま、こんにちは。私は附属小金井小学校で十六年間お世話になりました。

附属竹早中学校から昭和四十八年四月に音楽専科として転任したのですが、着任当初は、小学生に対する指導に戸惑うばかりでした。そんな中、講師で来られた渡辺茂先生（「たきび」で有名な）の授業の様子をたびたび参観させていただきながら、指導展開の方法を学んだことが懐かしく想いだされます。

私の音楽教育観「上手く出来なくてもよい、音楽好きの子どもを」は、渡辺先生の音楽授業から影響を受けたように思います。また、音楽委員会（アコーディオンバンド）の早朝練習なども楽しい思い出として心に残っています。音楽委員会のメンバーだった方や授業で触れ合った方達とは今でも連絡を取り合っていますが、皆さん立派に成長され、各界で活躍されていることを嬉しく思っております。

小金井小学校を離れたのは平成元年三月で、その後は北海道教育大学旭川校、奈良教育大学、日本女子大学人間社会学部、鹿児島大学教育学部等で学生達と共に学校の音楽教育のあり方について考えて参りました。また、鹿児島大学在任中には附属小学校長、幼稚園長、養護（特別支援）学校長を併任しましたが、管理職としての考え方は、小金井小学校で教務主任をさせて頂いた時の経験が活かされたように思います。

定年後は、のんびりと余生を送るつもりでおりましたが、椙山女学園大学から教育学部新設の協力依頼を受けて名古屋での生活、そして、昨年度からは鹿児島国際大学の短大部音楽科の四年制化で、再び鹿児島に戻っての勤務をして現在に至っております。

今思いますと、私の教員としての原点は小金井小学校にあります。小金井小は三学級編成に縮小されたようですが、今後も日本の発展に寄与する人材育成の礎の場として撫子の会と共に応援したいと思います。

立木　正

昭和四十一年四月、出身地（伊豆大島）にある都立大島高校を卒業し、東京学芸大学（小学校教員養成課程保健体育科）に入学した。

卒業後の昭和四十五年四月から八年間、都の公立小学校教諭を経て、昭和五十三年四月から六十二年三月までの九年間、東京学芸大学附属小金井小学校教諭として勤務した。（その間の二年間は、本学大学院に行かせて頂き、七年間の担任経験）

昭和六十二年四月から、東京学芸大学の教員（保健体育科の体育科教育学が専門分野）となり、現在に至っている。

平成二十一年四月に「教職大学院」が発足し、二十年間勤務した「保健体育科」の教員から、「教職大学院専任教員」となり、現在五年目を迎えている。

本学の定年退職年齢は六十五歳のため、平成二十四年度末（平成二十五年三月三十一日）で退職となる。

現在の担当科目は、「授業研究の方法」の必須科目、「健やかな体と健康」の選択科目の他、課題研究や二年間の実習等に関係している。

「教職大学院」は全国に二十五大学設置されており、教員の資質・能力や実践的力量の向上を図り、学校の中核的教員を育成することをねらっている。

現在までの我が人生六十五年間を振り返ると、大学時代の四年間、附属小金井小学校教員時代の九年間、東京学芸大学教員時代の二十五年間、合わせて三十八年間を「小金井キャンパス」でお世話になったことになる。

人生の半分以上をこの素晴らしい「小金井」で過ごすことができ、「伊豆大島」に次ぐ「第二のふるさと」として誇りに思う。

定年退職後は、趣味の英語会話を生かす英語通訳のボランティアができるよう、近隣の大学の聴講生等として、新たな気持ちで学生に再びなり、微力ながら社会に貢献できたらと思う。

緑いっぱい 仲間いっぱい 笑顔いっぱい

小林道正

自然体験を多くしている人の方が、していない人に比べて、前向きに生活し年収や読書量が多いという調査結果があります。

なるほど！附属の「なでしこ」たちを見れば、その調査の正しいことが頷けます。小金井小学校の至楽

荘生活と一宇荘生活は、全国に自慢できる特色ある教育活動です。その宿泊活動は、いつまでも永く継続することを願っています。

私は至楽荘や一宇荘での経験を生かして、現在、国立青少年教育振興機構の「自然の家」に勤務しています。子どもたちやその家族が、自然の中でいろいろな体験ができるように指導しています。特に、小学校の宿泊活動を支援しています。

国立の「自然の家」と「交流の家」などの施設が全国に二十八あります。利用するには予約が必要ですが、学校だけでなく、家族でもサークルなどのグループでも利用することができます。しかも、費用は食費

星の観察

木のぼり

(三食一六〇〇円)とシーツ洗濯代(二〇〇円)だけです。ぜひ利用してみてください。

●寄稿三編

芙蓉会のメンバー

石坂誠一（昭和十年豊島小卒）

豊島師範付属小学校を昭和十年に卒業した私達男女の同期生は、二十四回生にちなんで芙蓉会と名付け、有志が年々集まっていた。四、五年前から皆の年令が九十に近づき、会合は難しくなったが、一部の人々は時々旧交を温めているようである。私は男子の赤組で一年生から三年生迄、恵比寿から通学し、その後は目黒区洗足から小一時間もかけて通っていたので、友達が少なかった。

私の思い出は四年生以後に集まっている。その年担任が綿貫先生に変わった。先生は学業の指導に熱心であった。私は先生に出した最初の綴り方に綿を貫くとは面白い名前であると書いた。そんな事もあって、先生には特別可愛がって貰ったような気がする。生徒達はメンタルテストで選別された者の集まりで、かなりレベルが高かった。或る時、十二時と零時が同時刻なのか議論をした。連続や収斂を論じ合ったわけである。テストの成績が悪かった時、豆腐の角に頭をぶつけて死んでしまえと先生に叱られ、涙が止まらなかったことを思い出す。先生は中学校進学の為放課後特訓をされた。空腹になろうから菓子でもという親の要望が許されず、角砂糖とお湯が用意された。訓練のおかげか大勢が有名校に入学できた。その後、卒業生の大部分が人並み以上に仕事が出来たと思う。私達赤組だけでも学会関係では、国立大学の教授や学長、公務員では次官等が三人、特殊法人等でも中核となった人々があり、裁判官や大会社の役員、医者等で活躍した者も多い。一方では戦争で失った友もある。芥川龍之介の御子息である多加志君は、その一人で、学生時代から文学をめざす若人として注目されていた。男子は赤組の他に白組があった。白組は、学業だけでなくスポーツにも猛けていた。野球の紅白対抗では、いつも白組が勝った。サッカーでは卒業後旧制高校で大活躍をした者が何人もいた。この人達が小学校の対抗戦での主力メンバーであった。女子は緑組と呼ばれ、有名校に進んだ者も多く、また、後に著名になられた人と結婚された方々も少なくない。

至楽荘等様々なことを思い出しながら筆を置く。

（左より　吉田、並木、石坂）

思い出

並木満夫（昭和十年豊島小卒）

当時私の家は大塚にあったので、山手線で一駅乗ってゆかねばなりませんが、兄が行っていたので豊島小に入りました。池袋から歩いてゆくと正面の所に木造の師範の校舎があり、そこで曲った奥に鉄筋の小学校の校舎がありました。師範の正門の前の角に結構広い空地があって、そこには記憶術とか居合術とかいろい

ろ見世物が出ていたり、また確か、乗馬クラブの馬までいました。学校の帰りにはこの広場で道草を喰っていたので駅まで結構遠かったと思います。ここで道草癖がついたのですが、近年池袋を訪れて、あたりがまったく変わってしまって学校の門が駅のすぐそばなのにおどろきました。

学校では男子赤白二組、女子緑一組。私は赤組でした。担任の先生は綿貫先生、金縁の眼鏡を掛けたちょっと謹厳な感じの先生でしたが卒業の年かに止められたようです。旧友は五十人と多く授業の印象はほとんどないのですが、休み時間に加藤君、飯牟礼君、青木君らがよく教壇を走り追っかけっこをしていたのを覚えています。（加藤君は硫黄島で玉砕、お母さんは別記、妹さんが飯牟礼君の奥方か）

校庭は師範と一緒なので広く外で遊ぶのには恵まれていました。確かサッカーがさかんでした。あるとき教生の先生から聞いたのだったか、師範の木造の柔道道場には天井に血のついた足跡だったか手の跡があるのだと聞いて友達と師範の方まで探検にいったことがありました。

時々父兄参観があったが、我々は後ろが気になってしょうがない。ほとんど母親で、恰幅の良いのはだれだれのお母さん、あれがかの芥川龍之介の奥方（芥川君は戦死した。）袴姿で来られるのが加藤君のお母さん、といった具合でした。その加藤セチ先生には、後に理化学研究所で大変お世話になり親しくご指導を受けました。女性博士の初めのころの方で、当時珍しいスペクトルの大家でしたが、大変お人柄のよい方で面白い先生でした。ただ加藤君が硫黄島で戦死されてまことに御気の毒でした。クラス（赤組）から八名、白組から三名で十一名も東高尋常科に入った（そのころ誠志小、豊師小、青師小などが入学数で競争していた）ので、その連中とはずっと長い付き合いをしたが、もう集まれるのは三名しかいなくなりました。

撫子の思い出

森　昌植（昭和三十一年豊島小卒）

豊島小を卒業して二十年以上たったころ、小金井小で豊島の同窓会総会がありました。諸先輩の中には前にお会いしたような方が数名いらっしゃいましたが、その後同窓会名簿の役員リストを眺めていたところ学生時代にお付き合いのあった方の名前があり、びっくりして早速連絡をとりました。

小生が学生時代、信濃町に家庭教師として数年伺っていたご子息の母上であることが判明しました。その後ご子息とはゴルフをしたり、母上とは年賀状のやり取りを続けて四〇年以上に渡り親しくさせていただいております。先日、母上と二人のご子息を含め当方は順繰りに家庭教師を務めた三名が一堂に会して夕食会を開催しました。少なくとも母上が豊島の大先輩でなかったならこのようなお付き合いはなかったと思います。その折母上から、撫子の会に投稿しろとの厳命が下ったため、やむなく拙文を書く破目に至った次第です。定年をすぎた現在でもまともな文章を書くことはできませんが、恥を忍んで思い出を綴ってみたいと思います。

豊島では高木藤樹先生に六年間担任として指導を受けました。すでに彼岸の人となられましたが、高木先生は、柔道は黒帯で体格も立派なため、自分にとって山のような存在でした。勉強を強要することもなく、生徒に対しては常に穏やかに接しておられたと記憶しています。五、六年の夏の終わりごろ、クラス全員で大掃除をしたのち授業とは関係なく、男子全員に水着もなしにプールに入ってよろしいとの指示があり、自分を除き（豊島では至楽荘という臨海学校があり、夏の期間そこで三年間合宿をするため大多数は泳げるようになりましたが、小生は全く駄目でした）全員がプールに飛び込みました。数分たつと女子がプールを覗きに集まり、高木先生に対して自分たちも入りたいとの意思表示をしたため、結局クラス全員で季節外れの水泳を楽しみました。

小学校の時は、女子のほうがませているといわれますが、高木先生の弱点を見つけ、午後の授業が数回自由になったことがあります。なぜ自由時間になったかはその時は不明でしたが、最近になって女子が先生を強要して、自由時間を勝ち取ったことが判明しました。しかし、高木先生はわざと自分の弱点を見せることにより、表向きは先生が負けたと生徒に思わせる技量があったと思います。その一例としては、豊島では毎年、教生の先生が来られて教えを受けましたが、先生により、かなり教え方が異なることがわかりました。即ち、おとなしい先生とか生徒の気持ちは二の次として自分のペースで授業をする先生とか種々なパターンがありました。しかし高木先生は強要することもなく、個人の能力に合わせて、指導をされたと思っています。自分は、授業ではほとんど発言することもなく、存在感の薄い生徒でしたが、高木先生は自分の性格を正しく把握していたと今でも思っています。

中学・高校時代も六年間仲間が変わらずに成長したため、今でも小学校時代と同様その絆は強く保たれています。豊島小学校時代、高木先生に六年の長きにわたって指導を受けましたが、勉強の思い出はほとんどありません。今になって思うことは、豊島の友人、先輩を作っていただいたことに感謝申し上げるとともに、これからの人生を共に歩めることを幸せに感じる次第です。

最後に一言。小生が学生時代に最初にデートした女性は豊島小学校の先輩でした。

菅野信正先生を偲んで

村井徳久（昭和三十二年豊島小卒）

桜満開の土曜日、前日まで初夏のような暖かさが一転、その日は朝から冷たい雨が降っていました。そういえば、先生の卒寿の祝いをした日も雨でした。

私たちの恩師である菅野信正先生が昨年十二月五日に九十二歳で永眠され、桜咲くこの季節に子かっぱで墓参をし、偲ぶ会に皆が集まりました。六十年前の桜の季節、先生との出会いからそれぞれが道を歩んできておりますがその根底にあるのは恩師の教えであると改めて皆が感謝しています。スポーツでは勝ち負けの価値観を、授業では経済と社会にどれほど国民の関わり方が重要かを、そして何よりも人としてのあり方を厳しく説いてくれた先生の温もりはいつまでも忘れることはありません。入学してクラス写真を撮るとき、小柄だった生徒をヒョイと抱き上げて最前列に座らせてくれたその大きな手の温もりをその生徒は今も覚えています。いたずらをして走って隠れようとしても校庭中に響くくらいの大きな声で叱られたこともありました。あのときの恥ずかしかったこと、なのに何故か嬉しかった。鵜原の海で遠泳したとき寒くて唇は紫色になるほど凍えて海からあがってくると、父兄会の飲ませてくれた葛湯の味は何よりもおいしい記憶となって残っています。その中心で先生が良く頑張ったなと笑顔で迎えてくれたあのときの嬉しさ、子どもにとっては一番のご褒美でした。先生が黒板に書く字はいつもしっかりと丁寧で大好きでした。

私たちの中にある豊島小学校の想い出はいつも菅野先生が真ん中にいます。そんな先生がある指導者となった生徒に遺した言葉があります。「ひとは褒めて育てましょう。あなたは良く頑張っています。」北京オリンピックの前に渡された言葉ですが、現役の選手達は成果を出せば表彰台に上がれます。指導者に表彰台はありません。この先生の言葉は彼女への表彰台となりました。

先生に会うたびに私たちひとりひとりのことをしっかりと覚えていてくださった先生の言葉ひとつひとつが私たちの宝物であり、表彰台の真ん中のメダル以上の大切なものです。

今頃は私たちの親たちと大好きな酒を飲みながらあの子達は変わらないナァと目を細めて笑っていることでしょう。先生、六十年間、本当に有難うございました。合　掌

クラス会

村上　稔（旧教員）

六月二日（土）成美教育文化会館（東久留米）に於いて追分小学校昭和二十九年卒業（二組）の者が集い、クラス会が催された。担任の村上の体調を考慮されての会場の設定であった。

拙宅から近い会場を選んで下さる優しい心づかいが嬉しく、心から感謝して、三年続けて出席することができた。

私は八十五才になり教え子の皆さんも七十才の古希を迎えられ、それぞれ楽しいこと、苦しいことを乗り越えて来た年月があったのだ。

会の初めには、声の出ない私に代って、私の感想文を生駒君が代読して下さった。追分小での「児童を大切にした教育」のすばらしさ、現在の教育現場の不安など雑感の一部を書いたのであったが、自分の声で伝えられないもどかしさ、無念さを感じた時であった。

出席の皆さんからは、家で咲いた沢山の花、自分で作られたケーキ等々、お茶とお菓子のクラス会は心のこもった会であった。

欠席者からの返信が披露されたが、病気のため不参加の方もあり、胸を痛め、回復を心から祈念した。

孫の世話の楽しさ、友人との旅行の楽しさ等々、参会者皆さんからほほえましい話も伺えた。

散会後、楽しい二次会も出来たとの事に安心した。

皆さん本当に有難う。

平松先生の絵の前で

つながり

山内幸子（昭和十七年豊島小卒）

今年の四月、附属小金井中学校一年生の乙幡幸千恵さんから、長い作文のコピーが届いた。「エーイ　コーラ　エーイ　コーラ」の掛け声で始まるドキュメント風の四百字五〇枚の力作だ。題は『呼応』。鵜原の合宿生活を中心に、日記・先生や友人との交流など、私達の文集『昭和の撫子』にも触れられている。素直な文章にひかれて最後まで読んだ。七〇年前の私達の鵜原至楽荘での楽しい日々が懐かしく甦り、潮風も匂う。この作品は「北九州市子どもノンフイクション文学賞」の審査員特別賞を受けられた由。ここに全文を紹介出来ないのが残念だ。

私達の文集『昭和の撫子―戦中戦後七〇年―』（平成十八年刊）を同窓会の会報でとり上げて頂いたのが御縁で、お母様から注文を頂き、当時小金井小生徒の乙幡さんから読後感が送られて来た。以来文通が続いていたのだ。

次世代、次々世代からのレスポンスを、嬉しく思う。

ホームページ担当から

副会長　佐々智樹
保坂健二

「撫子の会」ホームページ担当チームは卒業生同士の連絡や情報提供を一層盛んにして行くためにどんなことが出来るかを検討しています。「撫子の会」の年間を通したいろいろな行事やそれに関連したことを発信しつづけることは重要です。しかし多くの同窓生を抱え各卒業年度別、クラス別の同窓会活動報告や、会員相互の情報伝達が出来る参加型のホームページにするのはなかなか難しく頭を悩ませる問題です。

そこで今進めようと考えているのがフェースブックに「撫子の会」を立ちあげてみようかというアイデアです。フェースブックを活用することで卒業生、特に若い世代の交流が盛んになってくれることが期待出来ます。更にツイッターなどを上手く利用していろいろな発言や意見を取り上げて行くことも考えられます。個人情報を守ることが重要な課題でありますが、「撫子の会」を一層充実した同窓会にして行くには新しいコミュニケーションツールを活用して行かなければいけない時期に来ているのではないかと考えています。

http://www.nadeshikonokai.jp/index.html

■編集後記

編集担当　西山マサ子

撫子の会の会報つくりに携わって、十年が過ぎました。その間、九冊、発行しました。

毎回、何をテーマにするのか慎重に考えています。良いテーマが決まれば、会報の半分は出来たようなものです。

この号の特集「あの先生は、いま」は、理事の方々の雑談からヒントを得ました。まだまだ、多くの先生方に書いて頂きたいと思います。続けていきます。

四ページの先生方の写真をご覧ください。小金井小学校発足、初期の写真です。豊島小学校・追分小学校から合流した先生方です。この貴重な写真を提供して下さいました柄沢渥子先生有難うございました。会報が一段と良いものになりました。

小学校時代の思い出話を三編、クラス会便り二編寄稿して頂き有難うございました。

寄稿のお願い

会報の紙面をより気楽に、幅広い年次の方々に楽しくお読み頂くために年間を通して、いつでも寄稿をお待ちしています。同期会・クラス会・同窓の仲間の集まりなど、写真に説明を添えてお寄せ下さい。

「撫子の会」会報・第十三号
発　行　平成二十四年十月
この号の編集担当
金子修也
西山マサ子
野久尾悟
印　刷　山信印刷（山佐和雄）

投稿・寄稿　問い合わせ先
川田紀雄　電話（042-324-9912）
西山マサ子　電話（03-3815-9619）
Eメール masako@zaw.att.ne.jp
野久尾悟　電話（03-3720-8023）
同窓会事務局　東京学芸大学附属小金井小学校内
住所　〒184-8501 小金井市貫井北町四丁目一番一号
電話　042-324-9912 Fax 042-329-7826
撫子の会郵便振替口座
番号　00100-8-709121　加入者名：撫子の会